「日々の理科」（第 3148 号）　2023,-3,20

「３月のケヤキ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

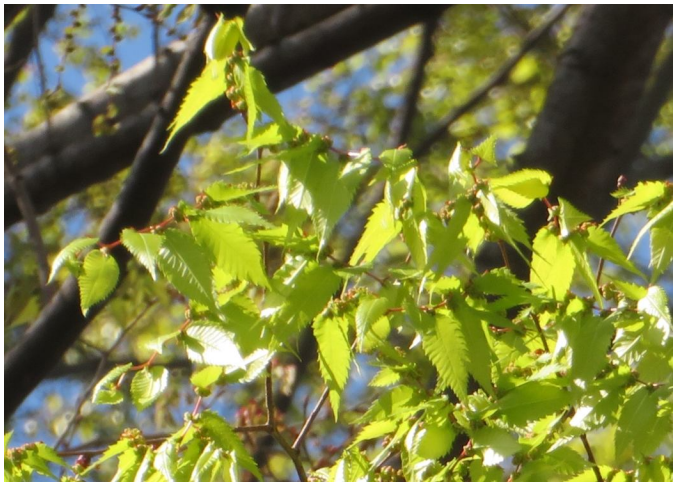
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ケヤキは武蔵野台地を代表する「落葉高木」である。附属小学校があるお茶の水女子大学も、武蔵野台地の東端にある「舌状台地」に位置し、構内には何本かのケヤキがある。

ケヤキの木は、半円形の美しい樹容を持っている。中央線や京王線の電車に乗っていても、遠くに見える樹木の中から、ケヤキを見つけ出すことができる。写真は、大学理学部と附属中学校の間にあるケヤキである。小学校の子どもたちも、自然観察に行くときに、この道をよく通っている。

樹木にはそれぞれの種類ごとに「樹容」がある。しかし、ほとんどの場合、建物やほかの樹木に邪魔されたり、人工的に剪定されたりして、本来の樹容は保たれていない。しかしこのケヤキは、ほとんど邪魔するものがなく、ケヤキ本来の「自形」を保っている。

今年は桜の開花も早かったが、ケヤキの芽吹きも非常に早かった。すでにリーフ・グリーン（若草色）の葉が芽吹いている。



ケヤキの若葉は、透き通ったような淡い緑色で、実に美しい。この葉が、晩秋には赤茶色になって散ることは、今の葉の姿からはなかなか想像できない。

よく見ると、花の蕾もついていた。秋にはこれが「ブドウの種」のような種子になる。種子はそのまま落ちるのではなく、数枚の葉とともに枝ごと落ちる。葉の力で回転しながら、遠くまで飛ぶのだ。３月のケヤキは、すでにその準備をしていたのである。